

「広島発二十時、大阪駅八時頃通過」と電報を依頼する。広島駅の分隊に戻り、片岡分隊長に報告。広島駅を後に、嬉しくって、嬉しくって、なかなか眠れない。通過する駅ごとにバンザイで迎えて貰い、本当に嬉しかった。岡山駅を過ぎた頃より、うつらうつらとしていた内にはや、神戸駅、ここでも、歓迎を受ける。尼崎を出るころ、大阪方面の戦友達は汽車のデッキに出ている。淀川の鉄橋を渡り、大阪駅八番ホームに滑り込むように入り停車す。ここでも、歓迎の風をうける。

構内を良く見ると義姉、妻と子供達の懐かしい顔がそこにある、元氣そうで嬉しかった。数分停車のため、言葉を交わす間もなく妻達も乗車す。京都駅で全員下車、憲兵がおり部隊は駅の裏へ隔離される。家族とも話しも出来ず、妻と子供達は大阪へ帰ることになる。自分達は午前十一時発の軍用列車にて出発、米原、敦賀、福井通過ごと歓迎をうける。金沢十七時三十分ごろ、みぞれ降るなかに到着。

金沢市民、留守部隊ラッパ隊の歓迎を受け言葉ではいい表せ無いほど嬉しかった。金沢駅広場、小雪降る

中、留守部隊が整列し、「戦死者一名、片岡分隊長他三十四名」と片岡分隊長が報告される。留守部隊長からも出迎への挨拶がある。片岡分隊長が出迎えの方々にも「本日、小雪降る中、お出迎え下さり」と敬意を表される。分隊長より留守部隊長に戦没者の慰霊を兼ね護国神社に参拝して帰還すと述べられる。バンザイの嵐の中、ラッパ隊の先導にて雨と小雪でびしょ濡れになりながら行軍、護国神社に参拝、戦死者の冥福を祈り帰隊す。バンザイ三唱の中行軍、分隊長の号令で歩調取れの足音も軽く衛門内へ。

同日、東部五十五部隊に転属、中山自動車隊に編入、十二月二十四日まで勤務・召集解除になる。

河南作戦奮戦するも無念敗戦となる

鳥取県 小林 武 夫

私は二十一歳、臨時召集。一片の赤紙にて昭和十七

年四月一日鳥取中部四十七部隊に入隊、連隊長沢貫一
大佐、中隊長山根光夫中尉である。私は長男で一家の
柱として働き、病弱な母親、幼い弟妹四人の六人家族
で、これからは父一人で生計を支えることとなる。

本日より大日本帝国軍人として張り切る。朝の起床
ラッパで始まり、九時の消灯ラッパまで初年兵は忙し
い。軍人勅諭、戦陣訓、歩兵操典、教練、飯上げ、洗
濯と目が廻る。走り行動で気合が入る。よく腹が空き、
古兵の残飯を手づかみで食すことなどがあつた。

初回の面会に父母が好物のほた餅を持参した。うま
くて目を白黒、大口で食べたことが今でも笑い話とな
っている。母は軍隊はつらいことないかと聞かれ、熱
い涙がぼろぼろこぼれた。

教練、夜間演習は次第に厳しくなる。七月に入り、
暑い日本原の砂丘での演習が続く。砂丘から帰る途中
では防毒面を装面し駆足を行う。息苦しく落後者が出
るほどで苦しいが頑張り帰隊した。

十一日、一期の検閲。朝四時に完全軍装で浜坂砂丘
に行軍、二日間の検閲にて終了。夜行軍で朝三時帰隊

した。十三日夜、人事係准尉より戦地行の命が下る。

早速、三泊四日の外泊が許され、帰隊。二十一日朝
四時、鳥取駅前道路に集合、最後の面会に皆別れを惜
しみ感泣した。連隊長の訓示があり鳥取駅十時発車、
字品着、二十五日。字品を朝五時輸送船で出航。玄海
灘は高波にて、ごろごろ、げいげいと吐く状況であつ
た。二十七日釜山上陸、山海関、天津、北京を経て目
的地の保定の歩兵第六十三連隊本部驚三九一二部隊に
入る。

朝七時の起床ラッパが鳴り響く。連隊長上坂勝大佐
に申告、訓示を受く。私は第五中隊配属となり、実弾
を受領。第二大隊本部の望都へ汽車で二時間で到着し
た。大隊長稲垣少佐に申告した。完全軍装で弾込めを
行い何時でも戦闘可能な状態となった。約十六キロ行
軍、軍装は重く苦痛であつた。中隊本部の完県まで真
夏の太陽の直射を受け、汗だくだくにて行軍した。初
年兵二十八人、西村准尉が引率し、敵状の報告を受け、
不安をいだきつつの行軍であつた。のどが渴き水を飲
むが石灰水にて下痢する。足を痛め、顎を出し、四、

五人の落後がある。私は歯をくいしばり歩き中隊営門に入る。やれやれである。

中隊長河田中尉は野戦兵の目と顔をもち、厳しく感じ、一層不安感をいだくが覚悟しかえって気迫で燃える。初年兵は飯上げ、兵器の手入れ、古兵の身の廻りの世話などで大変である。生水を飲み下痢が続き、皆困り、入院兵も出る始末である。私は水を飲まず、煮沸湯を飲み、何とか倒れずにすんだ。戦闘教練には毎日気合が入り、厳しさが増し、毎日のごとくビンタがとぶ。兵隊と背囊は叩けば叩くほど良くなると言い、教育された。

一カ月の実戦的教育にて第三小隊に配属され、塔山破分哨のトーチカ建設の命令出る。敵は共産八路军で午後二十時の日暮れに約四キロの行軍のち二十二時小高い山の分哨に就く。八人にて警備である。明、八月六日「第三小隊は午前三時出発、〇〇高地占領せよ」との命令が出る。寝る時間も無く戦闘準備を行い、朝食を作り、靴をはいたままゴ口寝、巻脚絆と服も着けたままで何時非常呼集がかかっても戦闘可能なる姿

勢のため寝付かれぬ。

早朝三時出動、日の丸弁当を背おい山の攻撃に這い登る。軍装は重く、何もわからぬままの不安感と苦痛でいっぱいである。五時頃、突然、中腹にて地雷が破裂した。特務隊である。日本軍側（支那の兵隊）二名が死傷した。

大音響と火花が上がり、身体がふるえる。薄明となり銃撃戦となる。ぴゅんぴゅん、ぴちぴちと無我夢中で応戦、約四十分の戦闘にて負傷兵二人を出したが、占領し、日の丸の旗を立て万歳を行う。早速、分哨建設に当たる。苦力（人夫）は各部落の村長に依頼して強制的に割り当てた。高さ七、八メートル、直径五メートルぐらい、土煉瓦を作り積み上げる。平地には周囲に壕を掘る。深さ約五メートル巾四メートル「快々でー（急ぎ作業せよ）」と早急に建設した。

敵襲を受けることもあった。出入りは壕の上に釣橋綱を掛け上下する。夜襲あり、敵二百人来襲する。擲弾筒と軽機で応戦する。銃撃戦となり三人死傷者が出る。分哨の警備は緊張する。十日から十五日で完成し

た。警備地をさらに前進するため筏山、北五候にも分哨を建設した。

十月一日付、一等兵に進級、第三小隊南五候、鳳山に勤務した。敵の便衣隊の危険があり、油断はできない。食料を受領に中隊を出る。馬夫（支那人夫）便馬車にて行く。途中、地雷破裂に前を歩く馬夫が犠牲となる。

十八年六月作戰命令が出て中隊本部に集結した。彈藥、糧秣を背囊にいっぱい詰め込んだ。第五中隊は朝三時出發、真泉、易泉と作戰を開始した。急行軍と急進撃で食事時間も無く忙しい。各六人での頑強なる戦闘で、物凄い銃撃戦となり、一進一退をくりかえし戦死傷者も続出した。中隊長以下着剣して突撃、敵陣に突入した。頭毛は立ち、死物狂いで突っ込み、突き殺した時の心境は筆舌にて言い表わせない。

三カ月の討伐を終り、中隊へ復帰した。私は過勞のため高熱と下痢で入院療養した。満州チフスとのこととで七日間で復帰した。十月、第一百師団司令部勤務へ転属の命が出る。長い間苦楽を共にした戦友と別れを

惜しみ石家莊を出る。任務は衛兵勤務で司令部並びに師団長の直接護衛で中隊長松浦大尉の指揮下に入る。将校が多く軍紀厳正である。

師団長木村中将閣下が北京方面軍旅団の各連隊を視察した。公用外出時は軍用トラックの前後に乗って護衛するが、約百人で編成された。

十二月、慰問隊「嵐寛のむっつり右門」「大相撲照国」など來演、目を楽しませる。十八年十二月上等兵に昇進した。十九年一月、第一百、三十九、六十三の三個連隊が石門に集結し、新しく中国戦闘教練が実施された。厳しい演習が二カ月つづき、我々衛兵中隊も師団作戰參謀堀大佐の指導で敵陣突破、壕、橋、繩、梯子を使い城壁によじ登り、突撃演習を行った。教育は各連隊にも教育作戰の難しさを教え、同時に心配感もある。戦友間にもデマがとび、頭髮、爪等を切り遺書も書き、身辺を整理する。

この予想は的中し、三月二日先発第六十三連隊は石門を出發、続いて第三十九、百十連隊と西方へ行進した。師団司令部の我々も六日、汽車にて順徳、開封、

新郷に到着。他の兵団の特科部隊も集結した。明朝六時出発、行軍は夕暮八時頃までにおよび大黄河に着いた。どんより曇る夜の寒空に川音が不気味にごうごうと音をたてて流れる。真つ暗闇に川風びゅうびゅう吹き、人声、馬のいななき、トラックの騒音に雨も降り出した。

われわれはトラックの後部につき、ゆれる橋を四、五十分かかって渡ったが定かではない。後でこれは橋ではなく船に厚板、枕木を工兵が敷き架橋したのとことであつた。

引き続き行軍し羅王城を攻撃する。早朝より砲声を聞き連隊は鳩陣地を攻撃するため急進撃した。われわれ司令部も食事の暇もなく進軍、一線部隊は蜜県、唐封、宜陽と重要地点を占領した。敵銃眼よりは銃撃があり頑強に抵抗、雨霰と弾がとび、砲弾も炸裂し厳しい銃撃戦となつた。我が軍は野戦重砲の援護射撃により突破した。双方に死傷者が続出した。なお急進撃をつづけ戦闘は五月に入る。

敵兵の死体はごろごろ。腐敗し悪臭を放つ。目、鼻、

口と、うじ虫が出入し肉体が紫色にはれ上がり、何とも悲惨な光景を目のあたりにしつつ行軍、洛陽へと向かう。光兵团（第三七師団）、成兵团（騎兵第四旅団）も参戦した。途中敵機が襲来して機銃掃射され、生きた心地はなく、人馬共に死傷者が出た。昼間は擬装して行軍した。五十キロ、三十キロ爆弾が投下されると、すり鉢状の坑が掘れ、爆風で倒れる。実に恐ろしい。逃げ場がなく身を守るに神経がとがる。

洛陽は胡宗南が死守している。蒋介石の別荘があり、外敵を防備するに東西南北に堅固な陣地を築き、周囲には高い城壁と壕がある。深さは約十五メートル中八メートルで、難攻不落に出来ている。三日、四日と厳しい戦闘が昼夜にわたり続く。戦は砲銃声が交又し悪戦苦闘、戦死者が続出した。我が軍は重砲十数門で城壁を目掛けて一斉射撃した。天地が裂けんばかりの大音響で数時間で一角を破壊した。壕は埋まり第六十三連隊稲垣大隊の突撃隊十数人が選出され、夜間縄梯子にて城壁を突破、数回にわたり戦車隊の突入、歩兵もこれに続き一斉に突入した。七月、多くの戦死者を出

し、西北角に日の丸の旗翻り、万歳の声上がる。これが河南作戦である。

七月八日、師団司令部が入城、師団長は林中將閣下となり休戦となった。

われわれ衛兵中隊は、司令部並びに師団長の宿泊、作戦中、行軍中など絶えず身辺を護衛する。縁の下の力持である。寒中は零下十度となりふるえながら立哨、夏は暑くてねむい。立哨中前に倒れかかることがある。昼夜歩哨に立つつらさは軍隊だから出来ることである。

二十年五月、西安に向い作戦開始、中支方面軍も参加し、またも緊張度が増す。軍装検査も終わり六日早朝、司令部と共に出発、龍門を通過、曾山に向かう。敵機の爆撃は厳しく、夜行軍にて第六十三連隊は迂回、第一百連隊は正面、第三十九連隊は迂回して進撃し、戦闘となる。真原にて機銃掃射に遭い苦戦した。友軍機は姿を見せない。大激戦となり死傷者が続出。また清京行城門より銃撃戦となる。連日連夜の苦戦の上、六月五日これを占領、われわれも八日入城した。 B 25

のしつこい爆撃や機銃掃射により被害が続出した。司令部は城外の寒村に移動し、われわれは壕掘り擬装と護衛に懸命である。

各連隊は奥地にて大激戦を展開し空爆もあって苦戦し、負傷兵も続出した。手、足、頭と包帯を巻き杖をついた兵隊がぞろぞろと山を下る。我が軍も犠牲が多く、ある中隊は全滅であるとの報もあった。

敵は〇〇高地に陣取り頑強に応戦する。我が軍が砲撃開始二時間で物凄いい音響と共に緑の山が見る間に赤土山と化し、苦戦の末軍旗を腹に巻き、連隊は一斉に突入し、高地を占領、日の丸を上げる。

七月に入り師団司令部は小部落に入る。食料少なく、煙草もなく、北兵団の吸いかすを吸うというあわれな姿である。戦友三人で食料徴発に無断で山に登る。食料なく民家に粟酒あり、三人とも空腹にうまく、腹いっぱい飲み出したとたん、山頂にてばんばんという銃声に驚く。頂上より十人余りの自警団がわれわれに撃つて来た。こんな所で倒れてなるものかと二方に別れ一目散に下山した。ぴちぴちと足元や頭上に弾がくる。

木陰に伏せながら酔いが廻り、ふらふらで帰隊したが牛尾曹長に大目玉を食う。

また食料難にて川魚ナマズを支那軍の木柄手榴弾を投げて採る。また民家の鶏、ホーレン草を採り塩味にて食う。各連隊はなおも戦闘を続行し、露王峯一三八高地の敵陣は堅固にて大激戦となる。曾歳にて昼の中を襲撃され、第六十三、三十九連隊から多数の死傷者が出たような二日間の戦闘となる。また重砲十数門が一斉射撃を行い一時間の戦闘にてはげ山と化した。白樺隊を結成し水盃にて手榴弾で敵陣に突撃すること数回、第三十九連隊は一三八高地を占領し日の丸を立てた。

食料不足にて頭がいたむ。八月二十三日われわれ師団は寒村にて北兵団と警備交代の命令を受け夜行軍にて一路洛陽へと退くこととなった。途中、暗号班に急々連絡入る。判らぬが悲観的な情報とのこと。急に夜行軍を中止し昼の行軍で退く。無条件降伏とは夢にも思っていない。龍門に退くと兵は外出し飲酒し興奮、殺気立っている。聞いて驚く。無条件降伏という。頭

に上る。われわれは長期間戦闘にて敵を殲滅し、奥地に攻め込み、戦果を上げ帰隊しているのに何事かと怒り狂わんばかりであった。われわれの心中察するに余りあり、残念無念で言葉もない。最後の一兵にいたるまで戦えと意気こむ。

午前十二時過ぎ洛陽に重い足取りで到着、待機となる。二十五日公に降伏の発表あり抑留生活となった。さあ今後われわれの身体はどうなるかが危惧され、悪い面に考えると人夫に酷使か殺害かと噂と、デマが飛ぶ。皆落ち着かず、朝から外出して飲酒と自暴自棄で大騒ぎとなる。師団長以下将校連の会議が開催され、指令が出た。一応の方向判明し落ち着く。軍給与乏しく底をつき、中央軍給与となり悪くなった。米食はななく乾し薩摩芋粉末粥となり、また麦粥となる。まるで牛馬の食料でたまったものではない。栄養失調となる。耐えるため私物や官物の毛布、敷布等を持ち出し、食料と交換して食べる。外出して焼き飯等を食べる。敗戦のどさくさにて危険を犯しても食す。

また、余暇を利用し演芸会が開催され、将棋、碁

トランプ、マーシャンなど好きなこととして抑留生活を送り、内地への帰還命令が出るのを待った。

二十一年三月五日帰還命令が出る。皆飛び上がり大喜び、兵長となり、十八日洛陽を出発した。汽車の無蓋車に乗車する。すし詰で昼夜走り、小便は車の中で用を足す。下車すれば住民が来て持ち物を剝奪する。徐州、南京と上海の収容所に入る。

厳重なる私物検査を終了し二十九日輸送船に乗船、四月一日博多上陸、四日午前七時復員した。出征後、妹が十八歳で死亡していた。帰郷して一家の柱として生活も安定し、結婚して三子の父となる。

軍隊の想い出

東京都 岸野善高

今から五十五年も前に逆戻りします。

昭和十年十二月一日、禁厭守護の名誉ある近衛歩兵第一連隊第七中隊に入隊、各個教練から小・中隊に及

ぶ教育訓練、武技を受けました。いよいよ第一期の検閲という朝まだ暗き昭和十一年二月二十六日午前五時、非常呼集の喇叭が鳴り響く。すばやく飛び起きて軍装を整え、営庭に整列、直に待機、弾薬などが支給された。

朝食を済ませてもまだこの状態が続き、他部隊が続々と進入してきた。何か起ったのだらうと戦友達とひそひそ話している中に、ようやく事の真相が判明した。歩三の安藤大尉が指揮する将校、百余人が首相官邸に進入、これを狙撃し、目下当時の宮城に向かって進撃中との情報が入った。

我が連隊は皇居をはじめ広場ならびに付近一帯の警戒の任に当たるべしとの命を受け、それぞれ任地についた。我が第七中隊は代官町新道及び竹橋方向を厳に警戒、反乱軍は参謀本部前から我が陣地に向かって砲列及び機関銃等で陣地を構築しているとのこと。薄気味悪いほど垂れ下がった九重の空はどんよりと曇り、この時代にしても珍しいほど朝から降り積もった雪は膝上までも没した。この中で飯盒の凍った飯を食べ、